

年少日本人帰国児童の冠詞使用 ——前提性と特定性の観点から——

友田 路

要旨

This study attempts to analyze the usage of articles in narratives produced by young Japanese returnees over a year. By using two perspectives of articles: the specific/ non-specific distinction [SR+/-] and the presupposedness by the speakers of the hearers' knowledge [HK+/-], their article usage is studied to determine whether attrition of articles occurs corresponding to a reversal of the Four-stage Hypothesis (Cziko, 1986; Thomas, 1989). Over-generalized use of definite articles, over-usage of zero articles and over-generalized use of indefinite articles are especially focused on to identify what stage of the Four-stage Hypothesis their article usage can be attributed to. Results show that there is distinctive difference in their accuracy of articles and in their stage level between the high and middle L2 retention groups. Returnees with high L2 retention developed their article use following the developmental pattern of the Four-stage Hypothesis. On the contrary, returnees with middle L2 retention simplified their article systems and showed increased usage of zero articles except for one subject whose L2 had drastically improved after returning to Japan. This subject's article usage demonstrated the same pattern as high L2 retention group. These results support Oller & Redding's research (1971) which proposed L2 learners' usage of articles is a certain indicator of their overall English proficiency.

キーワード：年少帰国児童，冠詞，4段階仮説，前提性，特定性

1. はじめに

幼児期を海外で過ごした低年齢の帰国子女は、身につけた第二言語能力（以下“L2”）を「あっという間に」失うとされてきた（富山，2004；p. 245）。従来、帰国子女の「言葉の問題」は日本語力の低下や漢字の知識不足を意味し¹⁾、年少帰国児童のL2保持は保護者の関心事ではなかった。しかし、2002年以降²⁾、財団法人海外子女教育振興財団主催の外国語保持教室（以下“保持教室”）や民間の英会話学校への問い合わせが急増し、年少帰国児童のL2保持への関心は近年急速に高まっている³⁾。

本稿で扱う「年少帰国児童」とは、義務教育就学前に帰国した児童と小学校2年生まで

に帰国した低学年の児童を指す。未就学段階で帰国した児童は、在留邦人の所轄機関である外務省および学齢段階の児童・生徒の所轄機関である文部科学省においてもその実態を把握しておらず、正式には「帰国子女」⁴⁾とは類別されない、いわばはずれ値的な存在である。また、就学児童を小学校2年生で線引きするのは、多くの言語喪失研究で「8歳以前に帰国した児童はL2保持がきわめて難しい」とされる年齢相当の学年であることによる(Cohen, 1975, 1989; Olshtain, 1986, 1989; Reetz-Kurashige, 1999; Yoshitomi, 1999)。このように、本稿が調査対象とする年少帰国児童は、従来の帰国子女の枠組みからははずれた集団ではあるが、一方で、幼児や低学年児童を帯同した海外赴任および帰任の件数そのものが増加していることが、財団の教育相談室への相談件数の推移からうかがい知ることが出来る。海外赴任・帰任に帯同する幼児の実態把握は難しいが、このような年少帰国児童が増加していることは、法務省の報告からも明らかである⁵⁾。

保持教室の場合、年少帰国児童の保護者の要望に応える形で幼児を対象としたクラスが拡充⁶⁾されたが、その実態は日本人年少児童のL2保持に特化した内容というよりは、ほとんどの講師が国際学校の教員であることから、インターナショナルスクールの低学年の授業形態に近い。また、専門家からのアドバイスも、年少児のL2能力を包括的に把握した上でその保持に「何が必要で何が効果的であるか」というような本質的な議論は先送りされ、「帰国後も英語母語話者との接触を絶やさない」「英語の本の読み聞かせやビデオの視聴を心掛ける」という場当たり的な方策が強調されている⁷⁾。

上記をふまえ、本稿では年少日本人帰国児童のL2変化を扱うが、義務教育就学前および低学年で帰国した児童を対象にそのL2喪失・保持に着目した研究は、日本ではほとんど例がない。そこで本稿では、年少帰国児童のL2変化に焦点を当て、その特徴を長期間の観察を通じて明らかにすることで、基礎データの充実と理論構築を目指す。

2. 先行研究

2. 1 測定項目の決定

帰国子女のL2変化でまず議論となるのは、対象となる測定項目の決定である。年少児童の場合、L2変化を見極めるために、「話す、聞く、読む、書く」の四技能のどの項目に着目し、どの言語要素の変化を調査するかは、その年齢ゆえの制約が大きい。

まず、四技能の何を調査項目として選択するかであるが、吉田・荒井(1990)をのぞく言語喪失研究のいずれもが帰国子女の「話す」能力のみに焦点を当てていることになり、本稿でも年少児童の帰国後の「話す」能力を調査対象とする。一般に「話す」能力の研究では、自然発話、会話、談話、ナラティブなど様々な分野が扱われるが、本稿では幼い子どもにもなじみ易い絵本を使つてのナラティブを用いた。

研究対象の言語要素の決定に関しては、帰国子女の言語喪失研究の多くが発話中の動詞の屈折に着目しているが、本稿ではこれを踏襲しないこととした。L2能力をある程

度保持している児童の発話には、帰国後の期間が長くなっても多くの動詞の屈折が見られるのに対し、L2保持が高くない児童は、動詞の発話そのものを省略する傾向があるため、その言語変化の細かい推移を見極めるのは難しいからである(友田, 2007)。

動詞の屈折の代わりに本稿で採用するのは、冠詞である。周知のように、冠詞はa (an), the, ゼロ冠詞(以下“Φ”)と数が少なく、その一方で発話中の使用頻度が高いので、年少帰国児童にもなじみ深い形態素である。英語母語話者の子どもの場合、一歳前の早い時期から文中の名詞の切り出しに冠詞を初めとする機能語をたくみに利用しているという説もあることから(Gerken *et al.*, 1990; Gerken & McIntosh, 1993)、冠詞は幼児が会話から必要な情報を得る際、重要な役割を果たすことが示唆される。また、規則動詞の過去形や三人称単数形よりも冠詞は英語母語話者の幼児に早く習得されるというBrown (1973)の指摘からも、現地の育児サークルやナーサリーを通じて積極的に英語母語話者の幼児とかかわった年少帰国児童であれば、冠詞をある程度習得していてもおかしくない。

一方で、冠詞の習得が日本人英語学習者にとって課題であることは、広く知られている(織田, 1982, 2002; Shirahata, 1988)。日本語では格助詞の「が」と係助詞の「は」が冠詞の役割を担っていることが、日本人英語学習者の冠詞習得を難しくする要因の一つと考えられている(Butler, 2002)。「冠詞がすべて脱落した日本人の英語(an English lacking all articles, an article-free English, such as might be spoken by one whose native language is Japanese)」という記述が示すように(Brown, 1973, p. 251)、日本人英語学習者の冠詞脱落傾向は著しいとされる。このようなEFL環境におかれた年少帰国児童が冠詞をどのように変化させていくかを長期間の観察を通して明らかにしていくため、本稿ではその使用状況および使用頻度を調査対象とした。

2. 2 英語母語話者の冠詞習得

年少帰国児童の冠詞習得を扱う前に英語母語話者の子どもの冠詞の習得に触れると、その習得過程は4段階(Four-stage)仮説に詳しい(Cziko, 1986; Thomas, 1989)。子どもの心理的な成長を踏まえて、冠詞獲得の過程を段階的に四つのステージに分類した4段階仮説によると、冠詞誤用を分析した結果、混沌とした冠詞使用の第1期から始まって、聞き手が話し手の情報を共有していない状況であっても子ども特有の自己中心的な発想⁸⁾から定冠詞を多用する第2期に移行し、その後、不定冠詞を一時的に定冠詞の代わりに用いる第3期を経て、冠詞をマスターする第4期に至るとされる。子どもによっては、第3期をスキップして第4期に移行するケースもあることから、4段階仮説においては、子どもが定冠詞の誤用を頻発する第2期からの移行、すなわち「幼児の自己中心的性からの脱却」(中島, 2002, p. 75)が、もっとも重要な側面とみなされている。

4段階仮説の基盤となるのは、Bickertonのバイオプログラム⁹⁾が主張する「物の見か

た」である。このような冠詞を有する言語特有の世界観は、冠詞を伴う名詞句が表現する対象の存在様態の把握の土台となる「物の見かた」である。どの冠詞をどの状況で使うかは、時制など言語外の状況や文脈によるところが大きいが、その前提として、対象となる名詞句が「聞き手にとって既知か未知か (presupposedness by the speakers of the hearers' knowledge)」と「特定指示物か不特定指示物か (the specific/non-specific distinction)」の区別が理解されていなければならない (ビッカートン, 1985, p. 154)。4段階仮説は、このような聞き手の「前提性」の有無と名詞句の「特定性」の有無が子どもに理解されていく発達心理的段階の変化から、冠詞習得過程を分析している (表1)。

特徴	対象となる名詞句	正しい冠詞	例文	第1段階	第2段階	第3段階	第4段階
[SR-/HK+]	総称的名詞	Φ, a, the	A paper clip comes in handy.	*Φ	a	a	Φ, a, the
[SR-/HK-]	非指示的	Φ, a	I guess I should buy a new car.	*Φ	a	a	a
[SR+/HK-]	指示的不定冠詞	Φ, a	Chris approaches me carrying a dog.	a, *the	*the	a, *the	a
	【例】初めて言及する名詞等		(The dog jumped down...)				
[SR+/HK+]	指示的定冠詞, イディオム, 固有名詞	Φ, a, the	The dog jumped down and started barking.	*a, the	the	(*a), the	the
	【例】前に言及された名詞、世界に一つしかないもの等		The moon will be full tomorrow.				

*は誤用を意味する

Thomas (1989, p. 337, 338) から引用

表1 4段階仮説の概要

Cziko (1988) による4段階仮説の検証から、Brown (1973) の幼児の発話の自然主義的観察や Maratsos (1976) の実験データに示されたように、英語母語話者幼児による冠詞体系の早い時期の習得には「前提性」と「特定性」の理解が一助となることが示唆される。

2. 3 退行仮説と「前提性」

ここで冠詞の習得と喪失の関係を確認すると、「喪失は習得の逆のプロセスをたどる」という Jakobson (1968) の退行仮説は、言語獲得と言語喪失が鏡像関係にあることを意味する (Berko-Gleason, 1982; Cohen, 1975; Olshtain, 1989; 富山, 2004)。この鏡像関係を4段階仮説に適用すると、冠詞の喪失は四段階を逆行することが予想される。4段階仮説は、前述のように発達心理学的な考察の上に成り立つので、子どもが自己中心的な発想から脱皮して社会性を獲得していくことを前提としているものの、冠詞の喪失が被験者の“赤ちゃん返り”を意味するものではない。定冠詞の過剰使用は、Butler (2002) や Tomasello (2003) も指摘するように成人L2初級学習者の傾向の一つでもあり、「前提性」

の理解が、自己中心性を脱却した成人にもなお難しいことを示す。このことから、定冠詞の過剰使用につながる「前提性」の不十分な理解が、単純に自己中心性によって引き起こされるだけではなく、「言語テキスト以前の百科事典的知識」に基づいた「テキスト外からの指示同定」(織田, 2002, p. 44)によって、冠詞を伴う名詞句が表現する事物や事象の存在様態の理解が影響を受けることが示唆される。すなわち、「社会慣習的思考パターン」(織田, 2002, p. 45)など、聞き手と話し手の間に適切な「指示同定」を行うのに足りる情報や文化が共有されていなくては、正確な「前提性」の理解につながらない可能性がある。要するに、名詞句に含意される文化的差異の認識の欠如がL2学習者の冠詞習得を阻む要因の一つであり、L2学習は付随する文化理解の一面も有することから、Oller & Redding (1971) の主張である、L2学習者の冠詞使用とその総合英語力には、学習者の母語の冠詞システムの有無が若干影響はするものの、一定の相関が認められることは理解出来る。

3. 研究課題

本稿では以上の先行研究の結果から、冠詞の習得には4段階仮説のような段階があること、またその喪失は習得の鏡像関係にあることを調査の前提として、年少帰国児童の冠詞変化が4段階仮説の鏡像関係を示すかについて調査する。具体的には、誤用の割合、その内容と頻度の分析を通し、以下を検証する。

1. 冠詞使用の包括的な正確さは、1回目より2回目の測定時に下降するか。
2. 冠詞使用は、 Φ 冠詞を多用するなど、第1期の傾向を示すか。
3. 冠詞使用は、定冠詞の過剰般化など、第2期の傾向を示すか。
4. 冠詞使用は、不定冠詞の多用など、第3期の傾向を示すか。
5. 冠詞使用は、第3期から第2期を経て第1期へ移行するなど、退行傾向を示すか。

4. 調査方法

4. 1 被験者

被験者は、義務教育就学前および低学年で帰国した小学校3年生の日本人男子児童5名である。被験者は保持教室に通う児童¹⁰⁾で、教室の資料や保護者とのインタビューから被験者の家庭環境、保護者の職業、生育環境、英語保持の動機などが類似していると確認出来た。帰国後の家庭での英語保持への取り組み方はどの家庭も熱心ではあったが、特に被験者Eの家庭は帰国後も家庭内で「英会話の日」を設けるなど、前向きな姿勢が際立っていた。帰国時期は、被験者AとEが就学前、被験者B, C, Dが現地小学校の1年目を終えた時期で、いずれも本稿の対象とする年少帰国児童の条件に合致している。

詳細は友田(2007)に譲るが、被験者は英語母語話者講師の評価、データ収集直近の進級試験の結果および保持教室に入室後最初のデータ収集時までには受験した英検試験のうちもっとも高い合格級によって、グループ分けされた。すなわち、被験者AとBはL2保持が比較的高いグループ、被験者C, D, EはL2保持が中程度のグループとされた。

4. 2 調査方法

本稿では、Mayer (1969) の '*Frog, where are you?*' を用いた英語の「お話づくり」の手法を採用し、小学校2年生時と1年後の小学校3年生時の二度データ収集を実施した。あらかじめ被験者には時間制限なく絵本を見せ、英語の語彙を思いつかない場合は随時実験者に尋ねてよいこととした。被験者は実験者と本稿のデータ収集の一年前から接触しすでにラポールが確立されていたので、全員が緊張なく発話することが出来た。被験者の発話データはICレコーダーで録音され、Du Bois *et al.* (1993) の表記に従い書き起こされた。誤用の判断基準の一つとして、ある句を決まり文句と記憶して不用意に用いたのか、それとも冠詞の誤用なのかの見極めは、Mehnert (1998) を参考に Praat ¹¹⁾ を用いてポーズの長さを測定し、その秒数を手がかりとした。1年後の2回目のデータ収集時に、「前回この本を見た」と答えた児童は被験者Bだけで、B以外の被験者に学習効果はなかったと推測される。

4. 3 分析手法

本稿で採用した4段階仮説は、幼児の冠詞誤用を各期の判断基準としている。どの冠詞の使用を誤りとし、本来何を使うべきであったかを判断するのは、評価者の主観によるところが大きい。本稿では、英語母語話者 ¹²⁾ と筆者の判断にずれが生じた誤用4.3%について、意見交換の後に見解を一致させることが出来た。とりわけ、誤りが冠詞の間違いなのか、それとも冠詞に続く名詞句の誤用なのか、あるいは熟語や動詞の誤用なのかの判断では意見が分かれるケースが多く、例えば、被験者Aの1回目の発話に見られた

- 1) A: And then I look I look behind the (0.289) ¹³⁾ the log and there was (0.989) frog, two frogs (1.130) and then (0.4710) come the grass there was a lot (0.1649) frogs.

では、a lotの後に0.1649秒のポーズがあることと、その前の発話のthere was frog, frogsのthere wasとfrogの間に0.989秒のポーズがあることから、there was a というフレーズを必ずしもチャンクとして記憶して使っているのではなく、a lot of という熟語のofが脱落し、本来であればthere were a lot of frogsとなるべきであったと判断した。

冠詞の誤りは、使うべき文脈で適切な冠詞が使えなかった場合と、使われる必要の

ない状況で冠詞を使用した場合の二点を、TLU値¹⁴⁾を利用して換算した。TLU値は正しい用法に対して正の相関となる為、TLU値の増加は文法的に正しい発話を、減少は間違った発話を示す。しかしながら、4段階仮説では文法的に正しく言えないことが次の段階への判断基準になる場合があることから、TLU値の増減はそのまま言語喪失の指標とはならず、どの冠詞を使うべき状況で何を誤って使用したかに注目する必要がある。

上記を踏まえ、冠詞誤用の内訳は、表1の「前提性」「特定性」の組み合わせのうちどの項目でいかに誤ったかを見極めた上でThomas (1989) の記述に則り分類したが、このプロセスは非常に煩雑なため、意見が分かれる項目は最終的にThomasの判断¹⁵⁾によった。どの状況で何を間違うかの傾向がこの分類で示されることで、被験者が4段階仮説のどの段階にあるかを推測する手がかりとなる。

5. 結果

5. 1 包括的な冠詞使用の正確さ

TLU値の推移が示すように、包括的な冠詞使用の正確さは、被験者B, Eがほぼ横ばいであるのに対し、被験者Aと被験者C, Dは二回目の測定時の方が低い(表2)。しかしながら、正確さの喪失に関して、L2高保持群の被験者AとL2中保持群の被験者C, D間でその程度が異なることは、以下の統計分析からも明白である。すなわち、分散分析の二元配置(繰返しなし)¹⁶⁾によると $F(4,4)=23.03$, $p<.01$ で被験者間に有意差があり、多重比較検定によると被験者AC間、BC間で1%有意差、被験者AD間、BD間、CE間で5%有意差がある。このことから、被験者A, Bの包括的な冠詞使用は被験者C, Dに比べて過ちが少なく二回目の測定でも比較的良好に保持されていることが分かった。一方、被験者EはL2中保持群ながらかなり正しく冠詞を用いることが明らかとなった。

また、冠詞のTLU値測定の基準となる冠詞を伴う名詞句の発話数は、表2のとおりであるが、被験者間に統計的な差異はない。冠詞以外の助数詞や所有格などの決定詞を伴った名詞句は表2には含まれない。

	TLU 値		冠詞を伴う名詞句数	
	1st	2nd	1st	2nd
A	85.96	75	55	49
B	80.39	80.56	58	108
C	34.04	22	46	49
D	58.33	39.47	45	44
E	56.79	60	77	61

表2 冠詞使用TLU値の推移と冠詞を伴う名詞句数

5. 2 Φ冠詞

	Φ冠詞誤用の割合(%)		特性別のΦ冠詞誤用頻度			
	1st	2nd	[SR+/HK-]		[SR+/HK+]	
			1st	2nd	1st	2nd
A	0	0	0	0	0	0
B	0	0	0	0	0	0
C	56	68	2	10	24	21
D	21	54	4	6	3	14
E	28	19	1	1	22	10

表3 Φ冠詞誤用の割合と特性別使用頻度

4段階仮説の第1期においてΦ冠詞誤用が増加するのは、母語話者児童の冠詞習得過程の特徴の一つであるが、母語話者の場合、「特定性が無い[SR-]」対象にΦ冠詞誤用が増加する(Cziko, 1986)。これに対し、表3が示すように、L2保持が中程度の被験者C, D, Eには、「特定性が無い[SR-]」場合のΦ冠詞誤用が見られなかったが、「特定性がある[SR+]」場合にはΦ冠詞の過ちを犯す回数が増加した。「前提性の有無[HK+/-]」に関しては被験者C, D, E間に共通の傾向は見られなかった。一方で、Φ冠詞誤用の割合は、L2中保持群であっても被験者C, Dの誤用割合が増加するのに対し、被験者Eは減少するなど相違がみられた。しかし、分散分析の二元配置(繰返しなし)によると $F(4,4) = 10.52$, $p < .05$ で被験者間に有意差があり、多重比較検定によると被験者AC間とBC間で5%有意差があったことから、被験者C, D, EのΦ冠詞誤用割合が異なる傾向を示すことは統計的には支持されない。

また、L2高保持群には「特定性」の有無に関らずΦ冠詞誤用は一度も見られなかった。

5. 3 定冠詞

定冠詞の過剰般化は、4段階仮説の第2期における、母語話者児童の冠詞習得過程の特徴の一つである(Cziko, 1986)。「前提性の無い[HK-]」状況での定冠詞の多用は、被験者A, B, Eに見られるのに対し、L2中保持群の被験者のうちCとDの二度目のデータにはほとんど見ることが出来ない(表4)¹⁷⁾。

	the				a			
	誤用の割合(%)		誤用頻度		誤用の割合(%)		誤用頻度	
	1st	2nd	1st	2nd	1st	2nd	1st	2nd
A	35	38	8	7	2.8	18	1	6
B	41	44	7	7	5	0	3	0
C	57.1	5.6	4	1	0	0	0	0
D	58	0	7	0	0	0	0	0
E	75	58	12	9	0	9	0	4

表4 定冠詞と不定冠詞の誤用割合と頻度

5. 4 不定冠詞

不定冠詞の多用は、母語話者児童の4段階仮説の第3期における冠詞習得過程の特徴の一つであるが、これをスキップして第4期に移行するケースも多い (Cziko, 1986)。表4が示すように、被験者A, Eが不定冠詞の多用傾向を示す一方で、被験者Bの二度目のデータには不定冠詞の誤用は見られない。

5. 5 退行傾向

(第0期)		第1期	第2期	第3期	
(Φ頻発)	Φ[SR+]誤用	Φ[SR-]誤用	定冠詞過剰使用	(不定冠詞多用)	不定冠詞定着
A			1, 2	2	
B			1, 2	1	2
C	2	1, 2	1		
D	2	1, 2	1		
E		1, 2	1, 2	2	

表5 4段階仮説の段階

本稿の年少帰国児童の被験者の冠詞誤用が、4段階仮説の鏡像関係を示すかであるが、L2高保持群とL2中保持群は概ね異なるパターンを示した (表5)。

一回目と二回目のデータ収集時に被験者が示した傾向をそれぞれ1と2として各期に当てはめると (表5)、L2高保持群の被験者A, Bの冠詞使用は、第2期から第3期への移行を示唆した (表6)。一方、L2中保持群では、被験者C, Dの冠詞使用は、第2期から第1期への退行を示し、さらに母語話者児童の第1期の特徴を逸脱した傾向を見せたため、仮に第0期とした。L2中保持群ではあるが、被験者Eは第1期から第3期への移行を示した。第1期のΦ冠詞については母語話者と同じ[SR-]状況での誤用はなかったので、空白とした。

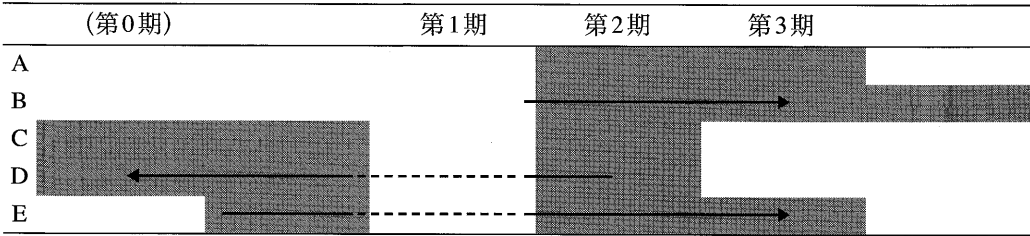


表6 4段階仮説と退行仮説の結果

6. 考察

年少帰国児童のナラティブにおける冠詞変化の解析が本稿の目的であるが、4段階仮

説と退行仮説を用いた結果、5. で述べたように、以下のような特徴が明らかになった。

1. 冠詞使用の包括的な正確さは、下降傾向を示す被験者 (A, C, D) と、横ばいを保った被験者 (B, E) に分かれた。
2. Φ 冠詞に関しては、母語話者児童の第1期の傾向とは異なる「特定性が有る[SR+]」状況でL2中保持群は Φ 冠詞を多用した。また、L2中保持群のうち被験者C, Dは Φ 冠詞誤用が二度目のデータ収集時に増加したが、被験者Eは減少傾向を見せた。
3. 定冠詞に関しては、第2期の傾向を顕著に見せる被験者 (A, B, E) と、ほとんど使用しなくなった被験者 (C, D) に傾向が分かれた。
4. 不定冠詞に関しては、母語話者児童の第3期の傾向を示す被験者 (A, E) と、使用が減少したことで第4期への移行を示唆する被験者 (B)、また誤用するまでの段階に至らない被験者 (C, D) の3パターンに分かれた。
5. 4段階仮説の退行傾向に関しては、被験者C, Dは退行現象を示したが、一方で被験者A, B, Eは4段階仮説の主張する発達段階を追従する傾向を見せた。

以上の結果から、年少帰国児童の冠詞使用には、被験者A, B, Eの示す「4段階仮説追従型」と、被験者C, Dの見せる「4段階仮説退行型」の、異なるパターンの存在が明らかになった。従来、年少帰国児童のL2は帰国後一元的に喪失すると思われていたので、このような母語話者児童の発達パターンに近い「4段階仮説追従型」の発見は意義深い。さらに、データ収集直前のL2保持の程度による分類でL2中保持群とされた被験者の中にも、Eのように「4段階仮説追従型」を示す被験者が存在したことも発見であった。同年齢の年少帰国児童のL2がなぜこのように異なるパターンを示すかについて、「4段階仮説追従型」「4段階仮説退行型」それぞれに対する考察を試みる。

6. 1 4段階仮説追従型

被験者A, B, Eの冠詞使用は、母語話者児童の4段階仮説に近い発達傾向を示した。被験者C, Dが明らかな「4段階仮説退行型」を示したのに対し、被験者A, Bは第2期から第3期までの発達を、また被験者Eは第1期以前の特徴を示しつつも第3期までの発達の可能性を示した。未就学段階で帰国した被験者A, B, Eであっても小学校3年生のデータ収集時におも母語話者児童の発達過程を追従していることは、本稿が初めて明らかにした点である。

被験者A, B, Eのこのような特徴は、生育歴やデータ収集直前のL2能力の高さからだけの説明は難しい。前述のように、友田 (2007) によると被験者のデータ収集直前のL2保持のスコアには被験者A, BとC, D, E間で明らかな差異が見られることから、被験

者EがL2中保持群の他の被験者同様の冠詞使用の特徴、すなわち「4段階仮説退行型」を示すことが推測されたが、実際には被験者Eの冠詞運用能力はL2高保持群に近かった。以下、4段階仮説追従型の被験者A, B, Eそれぞれについて考察を試みる。

6. 1. 1 被験者E: 帰国後L2躍進型

「4段階仮説退行型」と予想された被験者が「4段階仮説追従型」を示した典型が被験者Eである。被験者EのL2能力の躍進は、帰国後の家庭での活動を中心とする継続的な英語保持が冠詞使用に大きな役割を果たしていることを示唆する。

同年齢の年少帰国児童の中にあつて、被験者Eだけに突出して見られる特徴は、保護者のL2保持に対する非常に前向きな姿勢である。小学校1年生時の外国語保持教室の様子から、保護者の「L2保持」へのモチベーションの高さが被験者Eの精神的プレッシャーになっている可能性も否定出来なかったが、毎週「英会話の日」を設け家族一丸となってL2に接する努力は継続した。小学校3年生終了時、保持教室の進級テストで飛躍的な伸びを見せた被験者Eは、二度目のFrog story「お話づくり」の後のインタビューで、「英語がどんどん上手になってうれしい。これからも(L2保持に)がんばる」と高い意欲を示した。

Frog story では、帰国後のL2伸張を反映し被験者Eの包括的な冠詞使用の正確さは横ばいを示している。しかしながら、日本語話者の家族間でL2保持に努めるには限界もあり、被験者Eの発話には日本人家族内では容易に意味が推測出来る、日本語的発想の「ピア英語」を長く使い続けた影響も多々見受けられた。例えば、被験者Eは一回目のデータ収集時に「～のところ」という日本語を連想させるコロケーションを多用した(例2)。

- 2) E: And then, (0.719) there in the boy's (0.763) hole's place, there was a rat (1.257) and the boy u=m¹⁸⁾ (1.414) and in the dog's (0.427) place, the bee, (1.616) bee is angry.

また、被験者Eだけに見られる冠詞誤用もFrog storyのデータには散見される。被験者Eは名詞句が主格のケースでΦ冠詞が目立ち、予格や対格では比較的正確に冠詞使用が出来た。二度目のデータ収集時には主語に代名詞を用いる頻度が増加したため、主格に見られたΦ冠詞使用が結果的に減少した。このように被験者Eの語彙選択やコロケーションには間違いが目立つが、他のL2中保持群に比べ冠詞を初めL2文法や統語の過ちは多くない。

6. 1. 2 被験者B: 高レベルL2保持型

もっとも高い冠詞運用能力を示した被験者Bは、帰国直後の高いL2能力をそのまま維持出来ていることが、Frog storyの発話から推測された。保護者が帰国後開いた英語

教室での活動を通じて英語に対する意識を高めるだけでなく、米国の現地校に毎夏長期通学¹⁹⁾し「アメリカ人の子どもに(カードゲームで)勝つ」ことが、被験者BのL2保持の動機と思われる。

Frog storyの課題でも、被験者Bは終了後「もっとやりたい」と「英語を話す」意欲の高さを示した。B以外の被験者が、“There is a boy and he has a dog.”のように「地の文」を読むナレーターの目線で「お話づくり」を始め、“Frog, where are you?”のように適宜主人公の会話を組み込んだのに対し、被験者Bだけは“My name is Loggy.”のように二度の測定とも一人称で話を作った。そのため、所有格を含む決定詞使用が増えたため冠詞使用は減ったが、それでも表2が示すように、冠詞を伴う名詞句の発話数は被験者中もっとも多かった。被験者Bの「お話づくり」は一人称のこともあり臨場感にあふれ生き生きとしている(例3)。

- 3) B: The deer was a little upset. He carried me and then, then I fall into the lake. Splash!
Then I heard some noise. I told my dog, “Keep quiet!”

被験者Bの冠詞使用の包括的正確さは二度の測定ともにTLU値が8割を超えるなど極めて高い。被験者Bの冠詞使用の発達は4段階仮説の段階によく当てはまり、誤用のほとんどは、聞き手の「前提性の無さ [HK-]」に配慮を怠ったための定冠詞多用であった。

6. 1. 3 被験者A: 自信喪失L2保持型

L2高保持群の被験者Aは、小学校1年生時の保持教室では非常に高い言語能力を示し発話数も多く語彙も豊富で、保持教室の中心的存在だった。母語話者の講師からも「AのL2能力は抜きん出て素晴らしい」と評価が高かったが、小学校2年生時の保持教室の進級試験では、会話はよく出来たが筆記試験の点数が伸びなかったため²⁰⁾、予想されたレベルのクラスに入ることが出来なかった。このクラス換えを境に徐々に教室での発話数が減少し、小学校3年生時の二度目の「お話づくり」の前後には、保持教室での発話はほとんど見られなくなっていた。帰国後は米国へ家族旅行はしても現地校に通学する機会はなかった。

しかし、発話がなくなっても受動的な英語理解が出来ていることは、保持教室での行動やワークシートの進捗状況から推察された。被験者AのL2能力に対する自信の無さは、「僕よりずっと出来る子がたくさん帰国してきたから恥ずかしくて保持教室には行きたくない」と、フォローアップ・インタビューで答えていることからもうかがえる。

Frog storyの二度目で、例4のようにポーズやフィラーは目立つがしっかりと内容を理解し、主人公の置かれた状況を説明出来たことから、被験者AのL2能力は被験者Bに比べれば喪失は明らかだが、語彙や構文の選択からL2中保持群レベルになっている

るわけではないことが推測される。冠詞使用に限ればむしろ発達傾向を示しているのだが、「お話づくり」の後のフォローアップ・インタビューでは、「英語の単語が思いつかなくて焦った。全然ダメ。恥ずかしい」と自身のL2能力に否定的な見解を示した。被験者AのL2に対する自信のなさ、L2中保持群に見られる「該当する英単語が思いつかない」というような単純なものではなく、「鹿の角に引っ掛けられた主人公と追いかけてきた犬ががけから落ちる」といういわゆる cliff event をいかに的確に捉え、鹿サイドあるいは主人公サイドのどちら側に立って説明すべきかなど、何を動作主にして何を被動作主に設定すべきかの統語的な迷いから生じていることが二度目の例5からも推測される。

- 4) A: And they (1.818) then they heard a frog's sound, so he looked u=m(2.102) the in the tree. And there was a fro(g) u=m(2.613) mommy frog and the dad frog and there was a lot u=m(0.966) other children of the frog, (0.682) so the kid (0.979) get (0.809) one frog and (1.534) said, "Good-bye." and (1.363) went home.
- 5) A: The deer, u=m(1.811), the boy was under deer and (0.852) the deer (1.832), deer, u=m(4.388), a boy u=m(5.623), the boy and the dog (3.323) went down in the gr (0.426) pond.

以上三人に対する考察から、データ収集直前のL2保持の程度よりも、その後のL2の保持や伸長が冠詞使用に関っていることが推測される。言い換えれば、年少帰国児童の場合、たとえ帰国後のL2の保持程度が芳しくなくとも、L2保持継続の努力が正確な冠詞使用につながることが示唆される。帰国後の家庭を中心としたL2保持への取り組みが、英語母語話者児童の冠詞発達パターンを追従できるほどのL2能力向上につながったことはL2保持に前向きな保護者にとっては朗報ではあるが、もともとのL2保持レベルがそれほど高くない場合、EFL環境下でのこのようなL2保持への努力が、冠詞や語彙、コロケーションなどの誤使用を固定化させる懸念がある点は、注意を要する。

「4段階仮説追従型」の被験者A, B, E各々のL2能力の高さと冠詞運用能力の高さおよびその発達、L2保持や伸長から理解することが出来たが、これは、Oller & Redding (1971) の主張するL2学習者の冠詞使用と総合英語力の相関を支持する結果であり、冠詞使用とL2能力との関連性が示唆される。

6. 2 4段階仮説退行型

被験者C, Dの冠詞使用は、4段階仮説の主張する段階を逆行し、退行傾向を示した。とりわけ、Φ冠詞使用を「特定性が有る[SR+]」状況下で多用したことは、母語話者児童が「特定性が無い[SR-]」場合にΦ冠詞を使用する傾向がある4段階仮説の第1期段階よりも冠詞使用が未熟である可能性を示唆する。定冠詞や不定冠詞の使用に過ちがなかつ

たのは、正確に発話出来たというよりは、Φ冠詞使用が増加したために、定冠詞や不定冠詞を発話するまでに至らなかったという理由による。このようなΦ冠詞の多用は、4段階仮説の第1期段階より前の段階、すなわち第0期まで被験者C、DのL2能力が喪失した可能性を示す。

注目すべきは、このような言語喪失状況であっても「4段階仮説退行型」の被験者はL2発話続行に前向きに取り組んでいる点である。本稿では「お話づくり」を課題としたため、教室での発話や自然発話と異なり、被験者は「自信が持てない単語や構文は回避する」という忌避方略が使えなかった。このため被験者C、Dは、「時間を掛けて探索する」「実験者に尋ねて明確化する」「他の言い方で言い換えをする」のいずれかの方略方法を採用した。以下、被験者C、Dの冠詞使用について、方略も含めた考察を試みる。

6. 2. 1 被験者D: 言い換え方略型

L2喪失を補償する「言い換え方略」を何度か試みたのは、被験者Dであった。被験者Dの名詞句の発話が他の被験者に比べ若干少ないのは(表2)、「言い換え方略」の影響も考えられる。具体的には、一回目のデータ収集時に、被験者Dは主人公の男の子がペットのカエルを探しにさまざまな場所に出掛けいろいろな動物や事件に遭遇する場面で、細かく状況を描写することなく、“Not here.”の句で代用した(例6)。

- 6) D: There was not, there was not frog. The boy said, “I want to <L1探すは...L1>²¹⁾ look for... “Not here.” ((D gave the next page a hasty glance.))²²⁾ “Not here.” ((D turned the page.)) And “Not here.” ((D glanced down at the next page.)) “Not here.” ((D turned the page.)) And “Not here. Not here.” He was climbing the tree.

また例7が示すように、DはI don't know. というフレーズを用いることで理由を詳しく述べなくても話が進展するよう「言い換え」を試みつつ、日本語語彙の発話を「引き金」に該当英単語を思い出そうと努め、それでも分からなければ実験者に助けを求めた。

- 7) D: A boy <L1聞いただからね、聞く...L1> (4.819) ask, ask (4.295) he ask to bee, (5.657) but he not (1.257) he says, “I don't know.” And he, (0.466) he ask to <L1もぐらL1> mole. He says, “I don't know.” A bee, (3.352), he, (2.409) he ask to (0.733) a tree, but he u=m (5.473) <L1ふくろうだからL1> but (1.494) owl say u=m (1.833), “I don't know.”

小学校1年時の母語話者講師からの評価では、5名の被験者の中でもっともL2保持程度が低いと査定された被験者Dではあるが、“Not here.”や“I don't know.”という限られ

た句を駆使して話を続行する前向きな姿勢は、帰国時以来変わらない被験者Dの特徴である。被験者Dの文法や統語構造の誤りにとらわれないこのような「話す力」は、「4段階仮説追従型」の被験者には見られない特長であり、単に単語やコロケーションの選択や文法能力とは別の次元に「語る能力」を育む土台があることを示唆する。

6. 2. 2 被験者C: 日本語多用型

被験者Cは米国現地校の小学校1年生時に、「優秀児童対象の取り出し授業」²³⁾で小学校2年生のレベルを履修済みであったため、帰国後もその語彙の深さや知識の豊かさは際立っていた。しかし、友田(2007)に見られるように、保持教室では文法や統語構造に自信がない場合に発話しない回避傾向が顕著で、徐々に発話数が減少した。

本稿の課題では回避方略が使えないため、被験者CはDとは異なる補償方略を用いた。すなわち、被験者Cは一回目のデータ収集時には、ポーズの間に自力で適切な英単語や構文の探索に努めたが(例8)、二度目のデータ収集時には、日本語で実験者に該当英単語を尋ねることが目立った(例9)。

- 8) C: And (8.629) and (3.208) the bee (9.293) was (3.319) dog, (2.544) bee will dog (8.076) bee will dog (14.212). (R²⁴⁾: OK, you can skip the page, if you want to.) Dog (2.766) dog will (4.757) run because (3.153) bee (3.153) is (1.493) going (1.132) to (2.268) the dog.
- 9) C: But (1.727) call, call but (2.774) dog (1.332) ca (0.667) call <L1 穴は? L1> (R: A hole...) C: call (2.663) in a hole (1.886) and (2.164) there ends <L1 そこは? そこって何? L1> (R: There ...) C: There was a (1.50) mole's (1.414) house. @²⁵⁾

C, D以外の被験者に日本語で英単語の意味を尋ねる発話がほとんど見られない²⁶⁾ことから、適切な英単語の探究に気をとられて冠詞使用まで配慮が回らなかったという、トレードオフ²⁷⁾効果に近い関係性が示唆される。

以上から、被験者C, Dの英単語の喪失が冠詞の正確な使用をはばむ可能性があること、また、被験者C, Dの冠詞誤用はL2能力の低下と密接な関係があることが示唆された。これは、「4段階仮説追従型」の被験者A, B, E同様に、「4段階仮説退行型」の被験者C, Dの結果もまた、Oller & Redding (1971)の主張するL2学習者の冠詞使用と総合英語力の相関を支持することを意味する。

ここで留意すべきは、第1期に至らない冠詞習得の特徴を示した被験者C, Dではあるが、それがそのまま冠詞の理解の喪失を意味してはいない点である。正しく発話が出来ないことが冠詞の意味を理解していないことに結びつかないことは、幼児を対象にした実験からも明らかで (Maratsos, 1976)、冠詞の正確な発話が出来なくても、冠詞選択

の根拠となる「特定性」や「前提性」の理解そのものが喪失したわけではない。「特定性」や「前提性」が「4段階仮説退行型」の被験者にどの程度残っているかを見極めは、今後の課題として残される。

7. 結論と今後の課題

年少帰国児童のナラティブにおける冠詞変化の解析が本稿の目的であったが、4段階仮説と退行仮説を用いた結果、被験者A, B, Eの示す「4段階仮説追従型」と、被験者C, Dの見せる「4段階仮説退行型」の異なるパターンの存在が明らかになった。この結果から、冠詞使用の正確さとその発達が、二度目のデータ収集時のL2能力の高さを示唆することが推測された。同時に、帰国後の家庭でのL2保持への取り組みが、L2能力の伸長や冠詞使用に影響を及ぼすことも示唆された。

今後は、「4段階仮説退行型」の被験者の冠詞が表面的に失われているにもかかわらず、冠詞使用の基盤となる「特定性」「前提性」が本当に喪失しているのかを検証する必要がある。同様に、飛躍的にL2を伸張させた被験者Eを初め、「4段階仮説追従型」の被験者にも、この「特定性」「前提性」が備わっているか見極めなければならない。「特定性」「前提性」のような英語特有の「物の見かた」を習得し帰国後も保持できたかどうかについては、これまで帰国子女関連では全く研究されてこなかったが、母語話者児童に近いL2保持をEFL環境下で続けることが出来るかどうか、冠詞使用における「特定性」「前提性」のような英語特有の「物の見方」が関連している可能性は否定出来ない。

本稿では扱えなかったが、冠詞の選択に不可欠な英語特有の「物の見かた」には、「特定性」「前提性」に加えて、物の「複数性」や「(個別文化や未分化量状まで含めた)個性性」(織田, 1984)の理解もまた欠かせない。このような「物の見かた」が、年少帰国児童に習得されているかどうかも含めて、今後さらにデータ収集と実験を試み、分析を行いたい。

註

本稿は第7回日本第二言語習得学会年次大会(2007年5月20日静岡県立大学)でのポスター発表を改訂したものである。

- 1) 帰国児童の国語学習の難しさは、東京学芸大学海外子女教育センター(1986)『国際化時代の教育』の「(3)強化別学習困難度と学力」に詳しい。
- 2) 平成14年(2002年)の文部科学省「『英語が使える日本人』の戦略構想」により、小学校への英語導入の可能性が示唆されて以降、財団保持教室への年少保護者からの問い合わせが増加傾向を示した。
- 3) 保持教室や民間の英語学校への聞き取り調査から、日本企業がコスト削減の見地から海外派遣対象職員の年齢を低下させる傾向があること、それに伴い帯同児童の年齢も低下して

いることがうかがわれた。相談室への幼児帯同赴任および帰任に関する問い合わせ件数の増加から、財団は2006年に幼児帯同の注意点を盛り込んだ印刷物『母語を保つために』を発行した。

- 4) 正式な「帰国子女」とは、文部科学省の「学校基本調査」が調査対象とする、海外での滞在期間が1年以上で帰国した児童生徒を指す。
- 5) 学齢期の帰国子女数は、外務省の海外在留邦人子女数統計および文部科学省の学校基本調査で公開されているが、海外から帰国した未就学児童の場合は外務省・文部科学省の管轄ではなく、法務省の出入国管理統計年報の「滞在期間別帰国日本人年齢および男女比」の資料において「0歳から4歳」と「5歳から9歳」の枠組みで把握されている。同統計は2000年から入手可能だが、海外での滞在期間が1年以上の「0歳から4歳」の帰国児童数は2002年度に1万人を超えた。
- 6) 財団関連企業(株)ルーツインターナショナルの幼稚園児・小学校1年生向けの外国語保持教室を指す。
- 7) 2006年12月の上智大学での講演「英語習得と喪失——身につけた外国語を定着させるには」による。
- 8) 英国の幼児が「道でどこかのネコが死んでいたこと」を母に報告するのに、“A cat is dead.”の代わりに“The cat’s dead.”と言ってしまい、母親から“What cat?”と指摘される定冠詞の過剰使用の事例(織田, 1984, p. 106)は、幼児の自己中心性の典型である。
- 9) Bickerton (1981, 1984) のバイオプログラムはクレオール語に見られる普遍的な「特定性」「前提性」の「物の見かた」を初めて明らかにした。
- 10) 小学校1年生時にルーツの教室に通室していた児童の内、保護者の承諾の得られた児童を対象とした。
- 11) Praat はアムステルダム大学の Boersma & Weenink が開発した音声分析・合成ソフトである。
- 12) 日本人帰国児童の英語に慣れている TESOL 資格を持つ修士修了の英語母語話者に評価を依頼した。
- 13) Du Bois *et al.* (1993) に従い、() 内はポーズの秒数を指す。測定しないポーズは…で示す。
- 14) TLU 値の算出には Pica (1983) が Brown (1973) の評価方式を元に提唱した形態素推量化方式 (Methods of Morpheme Quantification) が適応される。詳しい説明は、友田 (2007) に譲る。
- 15) Thomas (1989) で不明の点は、第7回日本第二言語習得学会年次大会のために来日した Thomas 本人に尋ね判断の根拠とした。
- 16) 本来であれば対応のあるサンプル間の平均値の比較である t 検定を用いて分析すべきだが、今後の測定の可能性を視野に入れ、分析方法の変更がもたらす弊害を避けるため本稿では t 検定を採用しない。
- 17) 頻度差の分析にはカイ二乗検定が適切だが、誤用を示さない被験者がいる場合は使用出来ない。

- 18) Du Bois *et al.* (1993) に従い、u=m() は、フィラーとその秒数を指す。
- 19) 被験者 B は米国生まれのため米国の公立学校へ無条件で通学可能な資格を有する。
- 20) 被験者 A は能力不足で試験が出来なかった訳ではなく、筆記試験に真剣に取り組まなかった。
- 21) Du Bois *et al.* (1993) に従い、〈L1 L1〉は母語へのコードスイッチングを示す。
- 22) Du Bois *et al.* (1993) に従い、(()) 内の英文は調査者の推察する被験者の発話内容である。
- 23) Class for Gifted Children という能力別取り出しクラスを意味する。
- 24) R は実験者の発話を指す。
- 25) Du Bois *et al.* (1993) に従い、@ は笑いを指す。
- 26) 被験者 C, D 以外では一度だけ被験者 B が日本語で「もぐら」の英単語を尋ねた。
- 27) トレードオフ効果とは、「複雑さが上がれば正確さが下がる」というような負の相関関係が見られたことを云う。年少帰国児童のトレードオフ効果の詳細は友田(2007)に譲る。

参考文献

- Berko-Gleason, J. (1982). Insights from Child Language Acquisition for Second Language Loss. In R. D. Lambert & B. F. Freed (Eds.), *The Loss of Language Skills* (pp. 13-23). Massachusetts: Newbury House.
- Brown, R. (1973). *A First Language: The Early Stages*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.
- Bickerton, D. (1981). *Roots of Language*. Ann Arbor: Karoma Publishers, Inc. [『言語のルーツ』(筧壽雄、西光義弘、和井田紀子、訳) 東京: 大修館書店, 1985.]
- Bickerton, D. (1984). The language bioprogram hypothesis. *The Behavioral and Brain Sciences*, 7(2), 173-221.
- Butler, Y. G. (2002). Second Language Learners' Theories on the Use of English Articles: An Analysis of the Metalinguistic Knowledge by Japanese Students in Acquiring the English Article System. *Studies in Second Language Acquisition*, 24, 451-480.
- Cohen, A. D. (1975). Forgetting a Second Language. *Language Learning*, 25(1), 127-138.
- Cohen, A. D. (1989). Attrition in the Productive Lexicon of Two Portuguese Third Language Speakers. *Studies in Second Language Acquisition*, 11(2), 135-149.
- Cziko, G. (1986). Testing the Language Bioprogram Hypothesis: A Review of Children's Acquisition of Articles. *Language*, 62(4), 878-898.
- Du Bois, J. W., Schuetze-Coburn, S., Cumming, S., & Paolino, D. (1993). Outline of Discourse Transcription. In J. A. Edwards & M. D. Lampert (Eds.), *Talking data: Transcription and Coding in Discourse Research* (pp. 46-87). Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- Gerken, L., Landau, B., & Remez, R. E. (1990). Function Morphemes in Young Children's Speech

- Perception and Production. *Developmental Psychology*, 26(2), 204-216.
- Gerken, L., & McIntosh, B. J. (1993). Interplay of Function Morphemes and Prosody in Early Language. *Developmental Psychology*, 29(3), 448-457.
- Jakobson, R. (1968). *Child Language, Aphasia, and Phonological Universals*. Hague: Mouton.
- Maratsos, M. P. (1976). *The Use of Definite and Indefinite Reference in Young Children: An Experimental Study of Semantic Acquisition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Mayer, M. (1969). *Frog, where are you?* New York: Penguin Books USA.
- Mehnert, U. (1998). The effects of different lengths of time for planning on second language performance. *Studies in Second Language Acquisition*, 20(1), 83-108.
- Oller, J. W., & Redding, E. Z. (1971). Article Usage and Other Language Skills. *Language Learning*, 21(1), 85-95.
- Olshtain, E. (1986). The Attrition of English as a Second Language with Speakers of Hebrew. In B. Welten, K. De Bot & T. van Els (Eds.), *Language Attrition in Progress* (pp. 187-221). The Netherlands: Foris.
- Olshtain, E. (1989). Is Second Language Attrition the Reversal of Second Language Acquisition? *Studies in Second Language Acquisition*, 11(2), 151-165.
- Pica, T. (1983). Methods of Morpheme Quantification: Their Effect on the Interpretation of Second Language Data. *Studies in Second Language Acquisition*, 6(1), 69-78.
- Reetz-Kurashige, A. (1999). Japanese Returnees' Retention of English Speaking Skills: Changes in Verb Usage over Time. In L. Hansen (Ed.), *Second Language Attrition in Japanese Contexts* (pp. 21-49). New York: Oxford University Press.
- Shirahata, T. (1988). The Learning Order of English Grammatical Morphemes by Japanese High School Students. *JACET Bulletin*, 19, 83-102.
- Thomas, M. (1989). The acquisition of English articles by first- and second-language learners. *Applied Linguistics*, 10, 335-355.
- Tomasello, M. (2003). *Constructing a Language: A Usage-Based Theory of Language Acquisition*. Cambridge: Harvard University Press.
- Yoshitomi, A. (1999). On the Loss of English as a Second Language by Japanese Returnee Children. In L. Hansen (Ed.), *Second Language Attrition in Japanese Contexts* (pp. 80-111). New York: Oxford University Press.
- 織田稔 (1982) 『存在の様態と確認：英語冠詞の研究』東京：風間書房
- 織田稔 (2002) 『英語冠詞の正解：英語「もの」の見方と示し方』東京：研究社
- 東京学芸大学海外子女教育センター (1986) 『国際化時代の教育』東京：創友社
- 富山真知子 (2004) 「第二言語の喪失と維持」小池生夫編集主幹『第二言語習得研究の現在——これからの外国語教育への視点』大修館

- 友田路 (2007) 「外国語保持教室における低学年帰国子女の第二言語喪失：動詞句 TLU 値分析と退行仮説の観点から」『言語情報科学』5, 147-164.
- 中島誠、岡本夏木、村井潤一 (1999) 『ことばと認知の発達』東京：東京大学出版会
- 法務大臣官房司法法制調査部編 (2000-2006) 「出入国管理統計年報」東京：大蔵省印刷局
- 吉田研作・荒井貴和 (1990) 「帰国子女の外国語リスニング能力の保持に関する考察」『帰国子女の外国語の保持に関する調査研究報告書』平成元年度版, 9-28, (財) 海外子女教育振興財団